アメリカ人口学会2006年大会

アメリカ人口学会（Population Association of America）の2006年大会が3月30日～4月1日の日程でロサンゼルスにて開催された．176のセッションに加え，関連分野の研究会や若手研究者向けのワークショップなどが企画され，盛況であった．参加者はアメリカ本国からのみならず，アジアや欧州など多地域にわたっており，例年通り国際学会の様相を呈していたと言える．本研究所からは金子隆一人口動向研究部長が“Cohort Process to the Lowest Fertility in Japan: Estimation and Projection of Lifetime Measures of First Marriage and Birth”について報告し，筆者が“Unmarried Cohabitation and Family Formation in Japan”についてレイモ氏との共同報告を行った．

例年よりも死亡研究関連のセッションが多かった印象を得た．死亡データベースの充実が研究者の参入を促進したことが予想できる．世界的に進む少子化については，コーホート出生力の低下が一層明らかになり，出生率の下限や回復を無根拠に設定するべきではない，といった大胆な提言もなされた．移民の問題についても，移民の性比のアンバランスが送出国の結婚難を招いているといった指摘や，移入民の出生力が過大に測定される問題点の改善の試みなど興味深い研究が多かった．シンガポール大学を中心としたアジアの結婚プロジェクトなど，アジア各国の連携によるアジア研究の成果も今後大いに期待できそうである．

会長講演では，ウィスコンシン大学の Alberto Palloni 氏が“Reproducing Inequality: Luck, Wallets and the Enduring Influence of Childhood Health”と題した報告をおこなった．また，数理人口学や人口統計学の方法論に関する優れた貢献に対して与えられる The Mindel C. Sheps Award をペンシルベニア大学の S. Preston 氏が受賞し，若手研究者に与えられる The Clifford C. Clogg Award は，近年，出生力分野における数多くの業績をあげている同大の HP. Kohler 氏が受賞した．

（岩澤美帆記）